

令和4年度
一関修紅高等学校一般入学試験問題

第1時限

(1月20日 8:50~9:40)

国語

(注 意)

- 1 「始めなさい。」の指示があるまで、問題を見てはいけません。
- 2 答えは、必ず解答用紙の「答」の欄に記入しなさい。問題用紙に書いても無効です。
- 3 答えは、記号・文字・言葉・文などで書くようになっていますから、問題をよく読んで、定められたとおりに書きなさい。
- 4 書き誤りをしたときは、きれいに消してから新しい答えを書きなさい。はっきりしない答えを書いた場合は、誤りとされます。
- 5 解答用紙の※印の欄（得点の欄）には記入してはいけません。
- 6 時間内に書き終わっても、その場に着席していなさい。
- 7 「やめなさい。」の指示があったら、直ちに書くのをやめ、筆記具を置きなさい。
- 8 問題用紙は、表紙を含めなくて11ページで、問題は6題です。

次の文章は、瀬戸内海の葉名島の小学校に代用（臨時）教員として赴任した吉岡誠吾のある日の出来事を描いたものです。この文章を読んで、あとの(1)～(5)の問いに答えなさい。(19点)

〔本文までのあらすじ〕

誠吾は、子どもの頃の病気により話をするのができない。子ども達は体の大きな誠吾に「機関車先生」というあだ名を付けて慕うようになる。ある日、誠吾らは子ども達と島外の浦津へ校外学習に出かけるが、自由行動の時間に神社の境内で一人の女生徒が三人の男に囲まれて助けを求めている場面に遭遇する。誠吾は女生徒を助けようと間に割って入るが、抵抗しないまま三人の男たちに一方的に殴り続けられる。そんな誠吾の姿を目の当たりにした子ども達は、誠吾のことを「弱虫」と言って軽蔑するようになる。

次の本文は、その翌日の場面である。

誠吾が教室に入ると、生徒たちはそらそらしい顔で誠吾を見ていた。

周一郎は生徒たちの反応を見て

I 顔になった。

朝の挨拶も校歌を合唱する声も冷たく聞こえた。誠吾の顔も

II

ように元気がなく

映った。

授業がはじまっても昨日までの誠吾に

III

ような生徒たちの態度は失せていた。

神社で起こった事の成り行きは妙子から（注）一部始終を帰りの連絡船の中で聞いていた。

——吉岡先生はよく辛抱してくれた。

話を聞いて周一郎は誠吾の意志の強さに感謝をした。

しかし吉岡先生の行動をどうやって生徒たちに理解させたらよいものか、周一郎には良策が見つからなかった。

「葉名島のことをあんなに馬鹿にされたのに先生はただ殴られてばかりだった」^①

くやし涙をためて周一郎に説明していた妙子の顔を思い出して、島の間人が浦津の間人に対して抱いている特別な感情が子供たちにもあるのだらうと思った。

諸岡の息子との剣道の稽古を目の当りに見ている周一郎には誠吾の強さがわかる。それをどうやって生徒たちに伝えたいのだろうか。

放課後、周一郎はハナコの小屋の前でぼんやりと豆狸の子たちの様子を見ていた。

「校長先生、郵便屋さんが来てます」

妙子が雑巾を片手に報せてきた。

教務室の前に郵便夫が立っていた。

「電報です」

「ごくろうさんです」

発信先を見ると、浦津の教育委員会からだった。

——シンニンキヨウシ キマツタ レンラクコウ

電報の文字を読んで周一郎はため息をこぼした。

「校長先生、何ですか」

妙子が聞いた。

「何でもありません」

周一郎は電報をポケットに入れるととぼとぼ校長室の方へ戻って行った。誠吾が生徒たちの作文を読んでいた。

「吉岡先生、少しつき合ってもらえますか」

周一郎は誠吾に笑いかけた。顔の左半分がごくろのように腫れ上がった誠吾が白い歯を見せた。二人は小学校の裏手から来目山の東側の山径やまみちを歩いていた。

「阿部先生（注）が驚いていたでしょう。吉岡先生の顔を見て」

誠吾は笑いながら頭を掻いた。

「葉名島はどうですか」

誠吾は嬉しそうに二度、三度うなずいた。

「そうですか、それは良かった。こんなちいさな島でも厄介なことは多いもんです。先生が嫌になられてるんじゃないかと、私心配してるんです」

誠吾が立ち止まって、ひとさし指で自分の胸をさしてから島全体を両手でつつむようにし、子供たちの頭を撫なでる仕種しぐさをしてから、喉のどのあたりで親指とひとさし指を開いてつまむように前にのばして、

——私はこの島も子供たちも大好きです。

と手話で周一郎に話した。

「そうですか、先生は、島も、子供たちも、大好きですか。そりゃよかったです」

と周一郎が覚えた手話を思い出しながらい直した。誠吾がおおきくうなずいた。そうして胸の前で左手の甲へ相撲の手刀のように右手を一回ぼんと当てて跳ね上げ、周一郎にありがたの仕種をした。

「いいえ、感謝しているのは私の方です。先生が見えて下さってから生徒たちが明るくなりました。私も生徒もあなたからいろんなことを教えてもらってます。あの子たちが大人になった時にきつと先生に教えてもらったことのおおきさがわかるはずですよ」

周一郎は歩きながら、

「私はできれば先生にずっとこの島にいてもらいたいです。私も生徒たちももっとも先生と一緒にいて、いろんなことを教わりたいと思っています」

と熱っぽく話した。

やがて灯台が見えて、彼方に白波を立てる海がひろがった。

二人は灯台の左手の崖道がけを歩いて、豊後水道ぶんごからの海流が押し寄せるちいさな入江に出た。

「先生、あの崖の中腹に横長の窪地くぼちのようなものが見えるでしょう」

周一郎が指さした崖の中程にそこだけ岩が削り取られた場所があった。

「あれは海軍の弾薬庫の跡なんですよ」

周一郎は岩に腰かけてじっとその窪地を見つめていた。

「もつとも弾薬は結局運ばれなかったんです。もし弾薬を運んでいたら、この島は爆撃を被って吹っ飛んでたでしょう。ほら、あの窪地の下に尖った四角の岩が見えるでしょう。あれを島の者は八子部やこぶの裏切り岩と呼んでいた時期があるんですよ。ヤコブというのは島のある女がドイツ人との間に産んだ子供のことでして、彼女は浦津の遊廓ゆうかくで働いておる時にそのドイツ人に見初められたんですね。男は母国に帰って彼女は島に子供と戻ってきたんです。ヤコブは子供の頃からい

じめられましたね。なにしろ髪の毛が真っ赤でしたから。しかし気のやさしい子供で母親を助けてよく働いていました。昭和二十年の春先でしたか、敗戦の色が濃くなってから、岩国の海軍基地から兵隊たちが突然島に来て、あそこに弾薬庫を作りはじめたんです。島の者も駆り出されてね。私もその工事に行きました。ヤコブもその中にいました。何を作っているのか教えてもらえませんでした。だいたい見当はつきませんでした。その頃はもう敵の偵察機が島の上空を飛んでましたからね。ある時兵隊のひとりが『ここに爆弾を運んだら、この島も爆撃されるんだらうな』とふともらしたんです。それを耳にした島の者は皆驚きました。島を出ようと考えた者もいました。ところがそれから数日後、あの岩の上で焚火をはじめたものがありました。兵隊たちはあわてました。ところがあの岩までは波が荒くてなかなか近づけないんです。翌朝見ると誰もいませんでした。奇妙な話だと皆思いましたが、兵隊たちは自分たちの弾薬庫がここにあると偵察機に教えているようなものだから大変でした。次の夜また焚火が燃えました。兵隊たちが鉄砲で撃ちましたが火は消えるはずはありません。私、見てたんです。ヤコブがそこへ小舟で行くの。どうしてそんなことをするんだ、殺されるぞ、と言ったんです。ヤコブは『これは自分のやることだ。黙っていてくれ』と言いました。三日目の夜、焚火にむかって機関銃が何百発と撃たれました。夜が明けると、岩の上でヤコブが死んでいました。やはりヤコブはスパイだったと言うことになって、母親が岩国に連れて行かれました。島の長老たちも厳しい取り調べを受けました。皆ヤコブを恨みました。母親はそれっきり帰ってきませんでした。ヤコブの遺体は放ったままになっていました。火の玉が出るといふ噂が出ました。工事は中止になり、しばらくして戦争は終りました」

④ そこまで話して周一郎はおおきなため息をついた。

誠吾はじつと四角い岩を見ていた。

周一郎は鞆の奥から紐の付いたちいさな玉のようなものを出した。

「これ何だかわかりますか。これね、ボタンなんです。銀製です。ヤコブが私と初めて口をきいた時にくれたんです。彼の父親の形見だそう。私が彼に声をかけた最初の島の男だったらしいんです。つまり、最初の友だちだったんでしょ。たぶんヤコブは彼の一番大事な物を私にくれたんです。そうして私がヤコブと最後に口をきいた島の人間でした。私ね、自分が何かに負けそうになった時、このボタンを見るんです。何も語らないで、何の代償も求めないで、素晴らしいことをできる友だちが自分にはいたんだと……」

周一郎の淡々とした言葉は誠吾の胸の奥に響いていった。

波が容赦なく岩にぶつかっていた。風音とも潮騒ともつかない音の中に誰かの声が聞こえた気がした。

(伊集院静「機関車先生」による)

(注1) 妙子：六年生で学校では最年長の井口妙子。

(注2) 諸岡：佐古周一郎校長の友人(諸岡衆一)。

(注3) ハナコ：トンビに襲われけがをしていたところを誠吾が助けた雌狸。

(注4) 阿部先生：吉岡誠吾の同僚。

(1) 本文中のⅠ、Ⅱ、Ⅲには、それぞれどのような言葉が入りますか。最も適当な組み合わせを次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

- | | | | |
|---|---------|---------|---------|
| ア | Ⅰ 苦り切った | Ⅱ 沈んだ | Ⅲ 甘える |
| イ | Ⅰ 沈んだ | Ⅱ 甘える | Ⅲ さびしい |
| ウ | Ⅰ さびしい | Ⅱ 苦り切った | Ⅲ 沈んだ |
| エ | Ⅰ 甘える | Ⅱ さびしい | Ⅲ 苦り切った |

(2) 傍線部① 先生はただ殴られてばかりだったとありますが、その結果、誠吾の容貌はどのようになつてしまいましたか。本文中より、二十字以内でそのまま抜き出して書きなさい。(3点)

(3) 傍線部② 周一郎はため息をこぼした。とありますが、このときの周一郎の心情はどのようなものですか。最も適当なものを次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

- ア 新任教師が来ることで、子ども達と話のできない誠吾を、ようやく教師としての苦勞から解放してあげられるという安堵感。
- イ 新任教師が来ることで、誠吾に対する信頼を失ってしまった子ども達のかたくなな態度も和らいでくれるだろうという期待感。
- ウ 子ども達を見違えるほど明るく、大きく成長させてくれた誠吾が、この島から離れなければならなくなつたという寂しさ。
- エ 島特有のもめごとに巻き込まれながらも、子ども達から愛され慕われている誠吾を離任させなければならぬという失望感。

(4) 傍線部③ ヤコブは『これは自分のやることだ。黙っていてくれ』と言いました。とありますが、ヤコブは何のために、どのようなことをして、島を守ろうとしたのですか。それを次のように説明するとき、、にあてはまる言葉を、それぞれ十字以内で書きなさい。(3点×2)

ヤコブは、弾薬庫の ために、、島を守ろうとした。

(5) 傍線部④ そこまで話して周一郎はおおきなため息をついた。とありますが、なぜ周一郎は誠吾に「八子部の裏切り岩」の話をしたのですか。最も適当なものを次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。(4点)

- ア 三人の男に殴られながらも抵抗せずに大けがをした誠吾の姿が、島民から裏切られ死んでいったヤコブの行動と無念さを思い起こさせたから。
- イ 周一郎にとって誠吾は、ヤコブと同じように本当に大事なことを人々に教えてくれる大切な存在だということを、誠吾に伝えたかったから。
- ウ 誠吾もヤコブも島の外から来た人間だが、どちらも島の人々のために命を投げ出して力を尽くしてくれた人物だと感謝したかったから。
- エ 何も語らないということは、結局不幸を招き、これ以上誠吾がこの島で教師をすることは卜ラブルを招くだけだと忠告したかったから。

ある食品会社の営業部員の話によると、最近の若い消費者は、店頭で商品を買うより、同じものを自動販売機で買うほうが好きらしいのだ、という。酒屋の店先に酒の販売機を据えつけると、多くの若い人は店にはいらなくて、まっすぐに機械のほうに歩み寄る。閉店後の客のために置いた設備が、意外にも昼間から繁盛して、おかげで総売りあげも機械を置かない店より伸びるのだそうである。

たぶん、近ごろの若者は人と口をきくの億劫がる傾向があつて、店の主人と挨拶をかわすのさえ面倒くさいのだろう、というのがその営業部員の解釈であつた。そういえば、彼らにとっては、子供のときから買物物はスーパー・マーケットでするものであり、商品は手にとって黙ってレジスターに運ぶもの、という習慣ができてきている。核家族のなかに生まれ、受験勉強とテレビ見物で育った子供は、人づきあいの訓練ができておらず、他人と話すことがわずらわしくなるのは当然だ、という見方もある。昔から、社交がへただという定評のある日本人であるが、この調子では今後ますます、日本社会には仏頂面が氾濫することになる、という心配も否定できない。

しかし、その反面、昨今の余暇の増大は日本にも新しい変化をもたらし、とくに若い主婦を中心に、さまざまな社交活動が急成長しているように見えるのは、どう解釈したらよいのだろうか。現代の家庭婦人は、一日に七時間半の自由時間を持つていて、という統計があるが、それによれば、この自由時間の大半は広い意味での社交のために使われている、という。喫茶店でのおしゃべりが盛んなのはもちろん、現代にはもつと積極的な活動の場所があつて、そこでは世代や地域を越えて、多様な人間関係が生まれつつあるらしい。主婦ばかりではなく、学生や中年の男たちをも集めて、いま各種のスポーツ・クラブや、趣味の会や、文化サークルや、市民大学講座は大にぎわいだと伝えられるのである。

明らかに、二つの現象は矛盾しているように見えるのであつて、すべての社会現象についてと同様、単純な説明をくだすことはむずかしい。ただ、ひとつだけ考えられるのは、これも豊かな社会の産物であり、人々の心のなかで、ものの消費と人間関係の営みが分離し始めている、ということなのかもしれない。ある主婦問題研究者に聞いたことだが、昨今の主婦にとっては、化粧品を買うことすらすでに楽しみではなくなり、Xとして感じられている、という。まして、食品のような基本的な消費物質については、それが手にはいることに何の感動もなく、したがって、その受け渡しに何の「儀式」の必要も感じない、というのは当然なのかもしれない。つとに、私たちは水や電気のような物質の入手については感動を失い、それが挨拶ぬきで、自動的に供給されるのはあたりまえだ、と考えている。人間は、手にはいりにくいものを受けとるときには、その受け渡しごとに特別の人間関係を結び、ときには「祭」という、大がかりな社交の場所を作った。いまや、物質の消費はそういう機会を作る力を失い、人々は、それをできるだけ事務的に、機械的に処理しようとしている。そして、このような現代人にとって、最後に手にはいりにくいものとなったのは、ほかならぬ他人との心の交流であり、社交的な人間関係を結ぶことそれ自体だ、ということなのかもしれない。

(山崎正和「自己発見としての人生」による)

(注) 仏頂面…無愛想な顔。不機嫌な顔。

(1) 傍線部① もっと積極的な活動の場所 とありますが、それを具体的に述べている部分を、同じ段落の中から三十三字で抜き出し、初めと終わりの三字をそれぞれ書きなさい。(3点)

(2) 傍線部② 二つの現象 について、次の1と2の問いに答えなさい。(2点×3)

1 「二つの現象」とは、それぞれ社会の中の主としてどういう人々の間で起こっている現象について述べたものですか。それを次のように説明するとき、、 にあてはまる言葉を本文中からそれぞれ五字以内で抜き出し、そのまま書きなさい。

一つ目の現象は の間で起こり、二つ目の現象は の間で起こっている。

2 一つ目の現象と二つ目の現象には、どのような関係が認められますか。それを表す語を本文中から一語で抜き出し、そのまま書きなさい。

(3) 本文中の に入る言葉として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

- ア やめてしまふべきむだな習慣
- イ たんにつまらない日常の仕事
- ウ 美を求めるための切実な出資
- エ 普段の買い物とは異質な行為

(4) 傍線部③ 「儀式」とは、ここではどのようなことを表していますか。最も適当なものを次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

- ア 商品を売買する時に、品物の受け渡しだけではなく、社交的な人間関係を結ぶこと。
- イ 商品を売買する時に、品物だけではなく、領収証の発行と受け取りなども行うこと。
- ウ 商品を売買する時に、自動販売機に頼るのではなく、店内での受け渡しを中心にする。
- エ 商品を売買する時に、カードで支払うのではなく、釣り銭を伴う現金でやり取りすること。

(5) 本文の主旨として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。(4点)

- ア 商品を自動販売機で買うのを好む世代が増えており、機械を置いた店は総売りあげも伸びている。
- イ 現代では、商品は手にとって黙ってレジに運ぶものだという固定観念が人々の間に広まっている。
- ウ 商品が大量生産される豊かな社会において、消費が人間関係から分離するのは必然的な結果である。
- エ 消費を機械的にすませようとする現代人には、社交や人との心の交流は得がたいものとなっている。

3

次の俳句を読んで、あとの(1)～(4)の問いに答えなさい。

(14点)

- | | | |
|---|----------------|-------|
| A | さみだれをあつめて早し最上川 | 松尾 芭蕉 |
| B | 海に出て木枯帰るところなし | 山口 誓子 |
| C | 啄木鳥や落葉をいそぐ牧の木々 | 水原秋桜子 |

(1) Aは『奥の細道』という江戸時代の紀行文の中に収められている俳句です。この作者が岩手・平泉で詠んだとされる次の俳句の X に、あてはまる言葉を書きなさい。(3点)

X や兵どもが夢の跡

(2) Bと同じ季節を詠んでいる俳句はどれですか。最も適当なものを次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

- ア 冬帽子父のごとくに古りゆけり
- イ 梅の花あかいはあかいはあかいはな
- ウ あまりにも雀多くて案山子泣く
- エ 初夏の白きシーツを泳ぎ切る

(3) 次の文章は、Cの俳句の鑑賞文です。 Y にあてはまる最も適当な言葉を、俳句の中から抜き出してそのまま書きなさい。(4点)

群馬県赤城山での作品。啄木鳥が木をたたく中、深まる秋の気配を、淋しげに落葉する木々を中心としてとらえた。あくまでも明るい赤城山の主人公を Y とし、主語とすることに よって、強い臨場感を醸し出している。読む者は秋桜子と共に晩秋の赤城山の自然の中に立ち、いつの間にか啄木鳥を聴きながら同化してしまっている。

(4) AとCの俳句に共通する二つの修辞法(表現技法)が用いられている俳句はどれですか。最も適当なものを次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。(4点)

- ア 閑かさや岩にしみ入る蟬の声
- イ ねむたくて殻を曇らす蝸牛
- ウ たとふれば独楽のはじける如くなり
- エ 金剛の露ひとつばや石の上

次の文章を読んで、あとの(1)～(6)の問いに答えなさい。

(17点)

昔、丹後国(注1)に、浦島太郎と申して、年の齡よほ二十四五の男おとこありけり。ある日のつれづれに、釣つりをせんとて出いでにけり。浦々島々、入江入江いりえ、至らぬ所もなく、釣をし、貝(注2)を拾ひ、みるめを刈りなどしけるところに、^②ゑしまが磯といふ所にて、亀を一つ釣り上げける。浦島太郎この亀に言ふやう、「なんぢ、生うまあるものの中にも、鶴は A 年、亀は B 年とて、命いのち久しきものなり。たちまち、ここにて命を断たんこと、^③いたはしければ、助くるなり。常には、この恩を思ひ出いすべし」とて、この亀をもとの海に返しける。かくて、浦島太郎、その日は暮れて帰りぬ。

また次の日、浦の方かたへ出でて、釣をせんと思ひ見ければ、はるか海上に、小船一艘せうせんいっさうぶね浮べり。あやしみやすらひ見れば、うつくしき女房(注3)ただ一人波にゆられて、次第に太郎が立ちたる所へ着きにけり。浦島太郎も、さすか石木(注4)にあらざれば、あはれと思ひ、綱を取りて、引き寄せにけり。さて、女房申しけるは、「あはれわれらを本国へ送おくらせたまひてたび候まじへかし。これにて棄すてられ参らせば、わらははいつくへ何となり候ふべき。」と、かきくどき、さめざめと泣きければ、浦島太郎も、あはれと思ひ、同じ船に乗り、沖の方かたへ漕こぎ出す。かの女房の教へに従ひて、はるか十日あまりの船路ふなぢを送り、故里へぞ着きにける。

(「御伽草子」による)

(注1) 丹後国…今の京都府北部。

(注2) みるめ…海藻の類。

(注3) 女房…女人、女性。

(注4) 石木…石や木のような情けのないもの。

- (1) 本文中の A・B に入れる数字の組み合わせとして最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。(2点)

ア	A	十	B	百
イ	A	百	B	千
ウ	A	千	B	万
エ	A	万	B	億

- (2) 傍線部① つれづれに の意味として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。(3点)

ア 天気がよいのにつられて
イ することもないままに
ウ いつも行っているように
エ 嫌気がさしてきたので

- (3) 傍線部② ゑしま を、現代仮名遣いに書き改めなさい。(2点)

- (4) 傍線部③ いたはしければ とありますが、浦島太郎が亀を殺すのを「いたはし」と思った理由にあたる部分を本文中から十字以内でそのまま抜き出して書きなさい。(4点)

- (5) 傍線部④ 本国 と同じ内容を指している別の表現を、本文中からそのまま抜き出して書きなさい。(2点)

- (6) 本文の内容に合致しないものを、次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。

(4点)

ア 浦島太郎は、釣りをしたり貝を拾ったり海藻を刈ったりして暮らしていた。
イ 浦島太郎は、漁に出かけたときに釣り上げた亀をもとの海に返してやった。
ウ 浦島太郎は、助けた亀の背に乗せられて竜宮城へ連れて行かれた。
エ 浦島太郎は、一艘の小さな舟を綱で引き寄せ、乗っていた女人を助けた。

5

敬語表現に関する次の(1)～(4)の問いに答えなさい。

(11点)

(1) 次の説明文の [] にあてはまる適切な言葉を書きなさい。

(2点)

敬語表現は、話し手が①相手(動作主体)に敬意を表す尊敬語、②相手(動作の受け手)に敬意を表す [] 語、③聞き手に直接敬意を表す丁寧語の三種類に分けられる。

(2) 敬語表現を用いた次の①、②の例文の [A]、[B] に入れるべき言葉として適当でないものを、それぞれの **ア**～**オ**から一つずつ選び、その記号を書きなさい。

(2点×2)

① (夫が自分の親に対して)

「妻のご両親が、来週 [A] だよ。」

ア お見えになる

イ いらっしゃる

ウ お越しになる

エ 参られる

オ おいでになる

② (来客に対してスープを出し)

「どうぞ、冷めないうちに [B] ください。」

ア おあがり

イ いただいて

ウ めしあがり

エ お飲み

オ お摂り

(3) 次の文は、ある二人の会話文ですが、敬語表現として誤った使い方をしている会話を次の **ア**～**ク** から一つ選び、その記号を書きなさい。また、その会話の敬語表現として誤っている部分を抜き出し、正しい敬語表現に書き改めなさい。

(3点)

(例) 向こうの山を拝見してください。

(誤っている部分) 拝見して (正しい表現) ご覧

ア 「昨日の件について、お話いただけますか。」

イ 「そのことについて、私は何も存じません。」

ウ 「ちょうどその時間は、どこで何をされていましたか。」

エ 「その時は、私は友人と映画を見に行っていました。」

オ 「どこの劇場で、ご覧になりましたか。」

カ 「そこまで詳しく、おっしゃる必要はありません。」

キ 「あなたの物と思われる落とし物を、お届けしようとしていたのですが……。」

ク 「それなら、そうとおっしゃってくださいよ。何かの職務質問かと思いました。」

(4) 次の文の傍線部の言葉を、場面にあった適切な敬語表現に書き改めなさい。

(2点)

(場面) ツアーガイドが、ツアーに参加している観光客に対して説明している。

「皆さん、向こうの山の中腹にある赤い屋根の小屋を見てください。」

次の(1)～(10)の傍線部について、漢字の場合は正しい読みをひらがなで書き、カタカナの場合はそれにあたる漢字をかい書で正しく書きなさい。

(2点×10)

- (1) 東山町・猊鼻溪の四季折々の風情は、まさに癒しの空間である。
- (2) 「雲は湧き 光あふれて 天高く 純白の球今日ぞ飛ぶ 若人よ いざ……」
- (3) ピンクのワンピースを着用し、花束とバックを持って颯爽と歩く女性を見た。
- (4) 法律では、株式会社の設立に一人以上の発起人が必要であると決められている。
- (5) 世界のトップ選手をまじかに見られる千載一遇のチャンスだった。
- (6) 教育の二ナうところは、課題に対して、仮説を立て論証する力である。
- (7) 政府は、首都圏三県と大阪府にキンキュウ事態宣言を出した。
- (8) エンゼルスの大谷翔平選手は、ゴウカイに右翼席へ本塁打を放った。
- (9) 次の選挙では、各コウホ者の政策を吟味して投票をしたい。
- (10) 祇園精舎の鐘の声、……ジヨウシャヒツスイの理をあらわす。